

はしがき

原爆から半世紀を経て原爆災害の学術資料の重要性がますます高まってきている。1994年度の本センターの学術活動をまとめて見ると、センターの業務も多様化しつつあることが感じられる。資料調査部では昨年から試験的に開始した原爆被爆者の現在の精神的健康状態の実態調査が軌道に乗り研究レベルへの発展が期待できるところまできた。被爆者の総数も6万人を切ったが、今なお種々の医学的問題に苦しむ実態が明らかになりつつある。病理部の放射線と加齢の研究も、とくにプルキンエ細胞に関する知見は国際的にも注目されつつあり国際学会への参加も増えてきている。今年度はとくに原研病理の伊東助教授にはチェルノブイリでの甲状腺疾患研究調査紀行をお寄せいただき感謝申し上げたい。国際協力の時代とはいえ現地に出かけての仕事の困難さが忍ばれる。放射線被爆者は長崎、広島以外にも数百万人存在するといわれておりこの方面の調査研究は今後の長崎大学の重要な使命のひとつとなることが自明である。

次年度1995年は原爆50周年記念事業が目白押しであるが、センターにおいても展示室の全面改訂を計画しつつある。来訪者に短時間で原爆の医学的影響の本質の理解が可能となるような企画を練りつつある。センター職員一同のさらなる努力をここに御願いたいと思う。

原爆被災学術資料センター長 朝長 万左男